

# 日蓮大聖人御書全集

そやどのごへんじ

## 曾谷殿御返事

じょうぶつようじんしょう

（成仏用心抄）

新版  
1433  
〜  
1435

そやどのごへんじ じようぶつようじんしよう

# 曾谷殿御返事（成仏用心抄）

けんじ ねん がつ にち

建治2年（'76）8月3日 55歳 曾谷殿

そ ほけきようだいいち ほうべんぼん い しょうぶつ ちえ

夫れ、法華經第一の方便品に云わく「諸仏の智慧は

じんじんむりよう うんぬん しゃく い きようえんむへん ゆえ

甚深無量なり」云々。釈に云わく「境淵無辺なるが故に

じんじん い ちすいはか がた ゆえ むりよう い

甚深と云い、智水測り難きが故に無量と云う」。

きようしゃく こころ ほとけ 成 みち きようち

そもそも、この経釈の心は、仏になる道はあに境智の

にほう きよう ばんぼう たい い ち

二法にあらずや。されば、境というは万法の体を云い、智と

じたいけんしよう すがた い きよう ふち 辺

いうは自体顕照の姿を云うなり。しかるに、境の淵ほとり

深 とき ちえ みず 流 恙

なくふかき時は、智慧の水ながるることつつがなし。この

きようちがつ

そくしんじようぶつ

ほつけいぜん

きよう

きようち

境智合しぬれば、即身成仏するなり。法華以前の経は境智

おのおのべつ

ごんきようほうべん

ゆえ

じようぶつ

いま

各別にして、しかも権教方便なるが故に成仏せず。今、

ほけきよう

きようちいちによ

かいじごにゆう

しぶつちけん

法華経にして境智一如なるあいだ、開示悟入の四仏知見を

覚

じようぶつ

ないしよう

しようもん

しゃくしぶつ

さとりて成仏するなり。この内証に声聞・辟支仏さらに

およ

つぎしも

いつさい

しようもん

しゃくしぶつ

し

及ばざるところを、次下に「一切の声聞・辟支仏の知るこ

あた

と

と能わざるところなり」と説かるるなり。

きようち

にほう

なにもの

なんみようほうれんげきよう

ごじ

この境智の二法は何物ぞ。ただ南無妙法蓮華経の五字な

ごじ

じゆ

だいじ

め

い

けつちようふぞく

り。この五字を、地涌の居士を召し出だして結要付嘱せし

たも

ほんげふぞく

ほうもん

い

め給う。これを本化付嘱の法門とは云うなり。しかるに、

じようぎようぼさつとう まつぼう はじ ごひやくねん しゅつしろう きょうち

上行菩薩等、末法の始めの五百年に出生して、この境智

にほう ごじ ひろ たも み

の二法たる五字を弘めさせ給うべしと見えたり。経文赫々

めいめい たれ ろん

たり、明々たり。誰かこれを論ぜん。

にちれん ひと おんつか

日蓮はその人にもあらず、また御使いにもあられども、

じよぶん 粗々 ひろ そうろう すで じようぎようぼさつ しやか

まず序分にあらあら弘め候なり。既に上行菩薩、釈迦

によらい みようほう ちすい う まつだいあくせ ここう しゅじよう

如来より妙法の智水を受けて、末代悪世の枯槁の衆生に

なが 通 たも ちえ ぎ しゃくそん じようぎよう

流れかよわし給う。これ智慧の義なり。釈尊より上行

ぼさつ ゆず あた たま にちれん にほんこく

菩薩へ譲り与え給う。しかるに、日蓮、また日本国にして

ほうもん ひろ

この法門を弘む。

そうべつ にぎ

そうべつ にぎすこ

あい 背

また、これには総別の二義あり。総別の二義少しも相そむ

じようぶつおも

りんねしようじ

基

れい

けば、成仏思いもよらず。輪廻生死のもといたらん。例せ

だいとうぶつ

だいじゆるく

しやかによらい

げしゆ

こんにち

しようもん

ば、大通仏の第十六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は、

まつた

みだ

やくし

あ

じようぶつ

たと

たいかい

みず

全く弥陀・薬師に遇つて成仏せず。譬えば、大海の水を

けない

汲

きた

けない

もの

みなえん

触

家内へくみ来らんには、家内の者、皆縁をふるべきなり。

く きた

たいかい

いつてき

さしお

しかれども、汲み来るところの大海の一滴を閣いて、また

たほう

たいかい

みず

もと

だいへびやくあん

たいぐち

他方の大海の水を求めんことは、大僻案なり、大愚癡な

ほけきよう

たいかい

ちえ

みず

う

こんげん

し

わす

り。法華經の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて、

よそ

こころ

移

かなら

りんねしようじ

禍

余へ心をうつさば、必ず輪廻生死のわざわいなるべし。

ただし、師しなりとも、誤あやまりある者ものをば捨すつべし。また、

捨すてざる義ぎも有あるべし。世間・仏法の道理によるべきなり。

まつせ そうとう ぶつぼう どうり 知 がまん じゃく

末世の僧等は、仏法の道理をばしらずして、我慢に著して、

し 卑 だんな 諂 しょうじき しょうよく

師をいやしみ、檀那をへつらうなり。ただ正直にして少欲

ちそく そう しんじつ そう もんぐ いち い

知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ。文句の一に云わく

すで しん ほつ だいいちぎてん は もろもろ

「既にいまだ真を発せざれば、第一義天に慙じ、諸の

しょうにん は すなわ うしゅう そう かんえ ほつ すなわ

聖人に愧ず。即ちこれ有差の僧なり。観慧もし発せば、即

しんじつ そう うんぬん

ち真実の僧なり」云々。

なんがくだいしい もろもろ あくにん じごく お うんぬん

南岳大師云わく「諸の悪人とともに地獄に堕ちん」云々。

ほうぼう

せ

じようぶつ

ねが

ひ

なか

みず

もと

みず

謗法を責めずして成仏を願わば、火の中に水を求め、水の

なか

ひ

たず

中に火を尋ぬるがごとくなるべし。はかなし、はかなし。い

ほけきよう

しん

たも

ほうぼう

かなら

じごく

墮

かに法華経を信じ給うとも、謗法あらば必ず地獄におつべ

漆

せん

杯

かに

あしひと

い

し。うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんがごとし。「毒気は

ふか

い

ほんしん

うしな

ゆえ

深く入って、本心を失えるが故に」はこれなり。

きよう

い

経に云わく「いたるところの諸仏の土に、常に師とともに

しょう

い

ほつし

しんごん

すみ

ぼさつ

に生ず」。また云わく「もし法師に親近せば、速やかに菩薩

どう

え

し

ずいじゆん

がく

ごうじや

ほとけ

み

の道を得、この師に随順して学せば、恒沙の仏を見たて

え

しやく

い

もと

ほとけ

したが

はじ

まつることを得ん」。釈に云わく「本この仏に従つて初め

どうしん おこ

ほとけ したが

ふたいじ じゅう

て道心を発し、またこの仏に従つて不退地に住す」。ま

いは ばじ

ぶつ ぼさつ したが けちえん

ぶつ

た云わく「初めこの仏菩薩に従つて結縁し、またこの仏

ぼさつ じょうじゆ

うんぬん

菩薩において成就す」云々。

かえ がえ ほんじゆう 違

じょうぶつ たも

返す返すも本従たがえずして成仏せしめ給うべし。

しやくそん いっさいしゆじよう ほんじゆう し

しゆ しん とく そな

釈尊は一切衆生の本従の師にて、しかも主・親の徳を備

たも

え給う。

ほうもん にちれんもう ゆえ ちゆうげんみみ さか

どうり

ゆえ

この法門を日蓮申す故に、忠言耳に逆らう道理なるが故

るぞい いのち およ

懲

に、流罪せられ、命にも及びしなり。しかれども、いまだこ

そうろう ほけきよう たね ほとけ 植 手

しゆじよう

りず候。法華経は種のごとく、仏はうえてのごとく、衆生

は田たのごとくなり。

もしこれらの義ぎをたがえさせ給たまわば、  
日蓮にちれんも後生ごしやうは助たすけ

もう  
申すまじく候そうろう。恐々きやうきやうきんげん謹言。

けんじにねんひのえねはちがつみつか  
建治二年丙子八月三日

にちれん かおう  
日蓮 花押

そやどの  
曾谷殿